

■トピックス

「TOKYO STATION VISION」に思う 大型映像のアルケオロジー

森山朋絵（東京都現代美術館）



TOKYO STATION VISION * 1



White Shadow * 2

去る9月22・23日、生まれ変わった東京駅・駅前広場を会場に、「TOKYO STATION VISION」が華やかに開催された。これは、東京駅丸の内駅舎保存・復元工事の完成記念イベントであり、「その夜、東京駅が夢のスクリーンになる——時空を超えた旅へ。百年に一度の映像スペクタクル。」と銘打たれ、東京駅や鉄道の歴史と未来を、人々と共有する光のページメントであった。

筆者は、クリスティ・デジタル・システムズ社のご厚意で原島博・竹田仰両教授らとともに現場に招かれ、公開前のプレビューを訪れた。闇に沈んだ駅舎前に人々が集い、期待に満ちて佇んでいる。その姿はロケットの発射を待つようで、最前列に立つ日本科学未来館の毛利衛館長、NHKの中谷日出解説委員らも、熱気に包まれ駅舎を見上げていた。閃光とざわめきが起り、プロジェクションが始まった。冒頭、駅舎のすべての窓に多数の人影が浮かんで動きだし、19世紀フランスや中国の影絵芝居のように滑らかに流れる。駅舎のシルエットが大きくめくれ、一転して機関車と動輪の画像に切り替わった。機関車はダイナミックに動き、ラッパや動物の場面に変容する。そして、巨大な人の手が現われてSUICAを操り、スイッチやイコライザに見立てた窓が、光と影の演出で鉄道路線図に変わる。また、美しい奥行きのある動画が光の線路を描いていく。最後に「TOKYO STATION」という文字が大きく映し出され、駅舎のエッジが光に輝く——やがてすべての音と光が大団円を迎え、轟くラッパや線路の音は消えて、街の音だけになった。私たちは歓声とともに拍手し、プログラムが終了しても観客の中に余韻は残り、口々に今見た映像について語りながら、帰途についた。

いにしえから、都市の風景に大型映像が投影された瞬間、そこはパブリックアートの舞台になる。過去の試みと比しても、今回は46台のプロジェクタで暗転と3DCGの動きとをうまく利用し、虚空に奥行き空間を出現させるトポロジ的な試みが新機軸で、非常に効果的であった。また、駅舎ビルのエッジをなぞる、計算しつくされた描線の動きも印象的であった。これは「プロジェクション・マッピング」の魅力でもある。この言葉が広まり、都市と大型映像とに再び興味が集まるのは「アートと社会」について考える上で非常によいことである。国内でも当該領域の歴史は意外に古く、写真家・渡辺義雄氏（東京都写真美術館初代館長）も生前、鎌倉由比ヶ浜で戦前に行った大きな投影に言及されていたが、戦後の前衛芸術を経て1980年代に隆盛を見せ、

つくば科学万博 SONY ジャンボトロンにおいて記念碑的な「TV WAR」も開催された。1990年代初頭から半ばにも、海外作家による大型映像の作品表現が隆盛を見せた。筆者は、1995年の恵比寿ガーデンプレイス+東京都写真美術館の開館イベントとして、写真美術館のビル自体と周囲を大きなだまし絵のキャンバスに仕立て、RDS（旧・龍電社）チームとともに大型機材による巨大映像プロジェクションを取行したことがある。それはフランスの作家ジャン＝ミシェル・ケン&エレヌ・リシャールによる「White Shadow」という作品で、イリュージョンをテーマにした開館記念展にあわせて都市に大きな錯視画を出現させた。突如恵比寿に出現した無音の巨大な動画は、厚生中央病院の入院患者たちや、道行く人々を楽しませた。映像マッピングという名はまだなかったが、国立西洋美術館の青柳正規館長がかつて指摘されたように「時が移り変わっても都市の機能が失われない」仕掛けが出現したのである。東京駅の新たな門出に相応しいイベントは大成功であったが、ここにつながる過去の流れを知ることによって、さらに大型映像への興味が増し、人工現実感につながる空間演出がより魅力的に、今後も数多く、隆盛を見せることを期待したい。

* 1

TOKYO STATION VISION

映像作家：西部 勲 (SMALT), 長添 雅嗣 (N・E・W), TAKCOM (P.I.C.S.), 志賀 匠 (caviar), 針生 悠伺 (P.I.C.S.)
音楽監督：岩崎 太整 (カットアップ)
総合演出：森内 大輔 (NHK エンタープライズ)

* 2

総合開館記念ライトアップ・プロジェクト「White Shadow」
映像作家：ジャン＝ミシェル・ケン&エレヌ・リシャール
恵比寿ガーデンプレイス、1995年1月21日・22日

【連絡先】

東京都現代美術館／事業推進課 企画係 森山朋絵
〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1
東京都現代美術館 事業推進課
Tel 03-5245-4111 fax 03-5245-1141
E-Mail DZD00256@nifty.com
URL <http://www.mot-art-museum.jp/>